

MEMORE

メモア

1988春 NO.5 女性エディター&ライター教室実習誌

幸せ色の夢の中で②田中 愛

二十一回目の冬③保坂みゆき

新米編集者に聞く④茶木真理子

サラム・アレイクム⑤酒井敦子

「ラスト・ステージ」に寄せて⑥加藤貴子

ヘラクレスたちの夜明け⑦松崎孝子

やくみの妙⑧南雲今日子

ロレンスと「チャタレイ夫人の恋人」⑨澤山治代

日本のなかのアメリカ/三人娘 座間キャンプ チラリのぞ記
⑩～⑪阿野昌子/石井るり子/宇佐神静江

みんなで歩けば東京人?⑫花田千恵子

いま、しなやかな女たち⑬渡辺頼子

愛を描く作家/渡辺淳一⑭中里智子

おぼさんの心得⑮小島美紀子

幸せ色の夢の中で

田中 愛

白いエプロンをつけた私が、青い空の下で笑っている。昨晚そんな夢をみた。幸せなんてそんなもの、きつと、そんな気がする。

最愛の母を失ってから約一カ月、私の生活はすっかり変わってしまった。今まで家の中のことをまるでやらなかった私が、主婦モドキをしている。

今までの私は、ゴミが落ちていようが、ホコリがたまろうが、全く構わなかった。おまけにチラカシ上手ときている。キッチンと片づいている部屋に私が入るだけで、なぜか散らかってしまふ。洗濯機の使い方はかるうじて知っているものの、古い二槽式のため、めんどりで、ほとんどやらなかった。包丁を握れば、周りで両親がハラハラしながら見ているという有様。家にいるのは好きだけど、家事をするのは、大の苦手だった私。

ほとんど主婦向きに出来ている姉と違ってどうして私は男に生まれなかったの？と何度思ったことだろう。当然、結婚しても、専業主婦になるなんて考えただけでゾツとした。そんな私にも、ちょっとステキな夢があった。「ウェディングドレスはママが作ってあ

げるわ」。私と姉が幼い頃から、母はよくそう言っていた。母の手作りウェディングドレス、考えただけでも胸がワクワクした。姉と私の子供の頃からの夢だった。

母はとて手先の器用な人だった。洋裁、和裁はもちろん、編み物、日本刺繍、日曜大工まで、またその他の趣味も豊富で、お茶、お花、油絵、園芸、バイク、と多趣味・多才な母だった。子供の頃の私の洋服はすべて母の手製。ハンカチから上履きにまで刺繍された持ち物は、私の自慢でもあった。

まだまだエピソードはつきない。ちょっとした大工仕事も得意だった母は、近所で家の建て直しをしている時、その大工さんに、あまった板をもらって来ては、小さな棚や台をつくってしまつた。昨年、やつとの思いで原付バイクの免許を獲得、知らない道をバイクで探検するのも、母の楽しみだったようだ。バイクと大和撫子は結びつき難いが、母はお花やお茶も好きだった。家の床の間には、いつも花を生けていたし、部屋にもよく花を飾っていた。

そんな母の後を受け継ぐのは、かなりしんどいと思つた。それと同時に、私は母の娘と思えば何でもできると思つた。そう思い込むことにした。前にも述べたように、私に女の子らしいという言葉はとうてい似合わない。女の子の失敗作だったに違いない。でも、あ

の何でもできた母の娘であることにも違いない。「よしっ！ やってやる」

最初は失敗ばかり、もちろん今でも、失敗は絶えない。どうも私とあの旧式洗濯機とは相性が悪いらしい。二日連続で洗面所を水びたしにしてしまつたり、包丁で手を切つたり軽い火傷はしょつ中、それでもなぜか楽しい。おぼつかないな手つきで包丁を使っていた私も、今ではトントントン、と調子がいい。料理は面倒だけれども、出来上がるととにかく嬉しい。味にはちょっとうるさい父も、「ママよりうまい」と食べてくれる。もしかして、料理の才能あるのかしら、なんて、たちまち天狗の鼻になっている私。

以前父は、私のツルンとして手をみるたび、「何もしない手だなあ」と半分あきれて言つた。その私の手が、ここ一カ月でみごとに荒れた。あかぎれ、切り傷のおまけ付き。そんな手でも、少しずつ母に近づいているように嬉しい。早く結婚して、幸せな家庭をつくりたい。母の手作りウェディングドレスは着れなかったけれど、自分で作るうかな、とも思っている。あの母の娘だから出来ないことないわなんて、また、天狗の鼻をしている私。白い仔犬を抱いた私が、黄色い壁にもたれて笑っている。そんな夢が、早く叶いますように……。

二十一回目の冬

保坂 みゆき

愛される時が終わった冬の朝

君がいなくても私は私

どうしてもまぶたが重い雪の日は

ストーブつけてあと十五分

あなたとの出会いはこんな霧雨の

ミルク色の空麻のジャケット

好きでない人に好きだと言うほうが

簡単なのはどうしてだろう

窓の外見ている振りの横顔に

突き刺すようなあなたの視線

黙ってちゃわからないよと言う君の

背中は今すぐしがみつきたい

今までに振った女は一ダース

十三番目の女になるか

初日の出映す水面がまぶしくて

振り向く君の顔が見えない

だんだんと青くなりゆく窓の外

スキー帰りの始発車で

だまされる振りをするのが女の子

信じてないのに信じてると言う

君が今投げた言葉をもう一度

シラフで言えたら信じてあげる

心しか預けられない体しか預けられない

いつでもひとり

はつきりと聞いてくれればいいじゃない

黙って怒っているくらいなら

今までに君が送った数々の

口説きの言葉をレビューさせたい

迷ってる時はいつでも強引な

男のほうに傾いてゆく

「愛」という言葉と君の存在を

少し信じてみようかと思う

十人の男に振り返られるより

たった一人の気持ち欲しい

一日の中で一番つらいのは

眠れぬ夜かひとりの朝か

今もまだ遅くはないよ

本当の君の気持ちをただ知りたいよ

惑わせるばかりが能じゃないんだと

君を失くして初めて気づく

見えすいた心気つかぬ振りのまま

ついて行きたい夜のドライブ

傷つけるはずじゃなかった

裏切ったわけじゃなかった霧雨の夜

信じてても信じきれない人と居て

愛することをためらっている

「もう一度やり直そうか」という言葉

待ってはいたけど受けとめはしない

「もう一度やり直そうよ」と言う君を

三月前なら受けとめたはず

好きだからこそ許せない事もある

友達だったら良かったのにね

泣き疲れ眠る吾の背にかけられた
最後の優しさ黒いジャケット

新米編集者に聞く

茶木 真理子

編集者を目指す私にとって、何が一番「身」になるんだろうか。そう考えた末、実際に編集者になって「インタビュー」をすることにしました。しかも、出来立て新米編集者の話を聞く。ベテランよりも、身近で、同じ気持ちになって話ができると思うし、これから自分の刺激になれば、大成功である。

そんなわけで、編集者の卵のインタビューの始まり、始まりである。

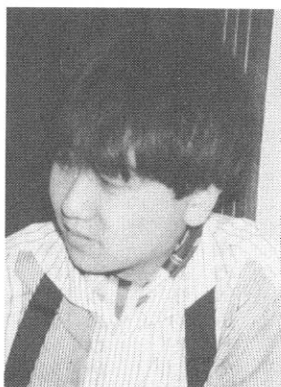
新米は校正ミスに要注意！

——お忙しいところ、ありがとうございます。財部さんは現在、教育関係の編集プロダクションに勤めているようですが、具体的にどんなことをしている会社ですか。

財部 版元からの依頼で、主に入試のテキストや模試などを作っています。

——現在はどうな仕事をしてるんですか。

財部 主な仕事としては、西日本の朝日新聞に月一回、「高校入試の手引き」という解説つきの問題（社会担当）を書いています。その他に大学生のための就職テストや高校入試模試なども作りました。



たからべ 財部 智さん。(株)プロ・メテ勤務。昨年10月入社。

——問題を作るんですか。苦勞も多いと思いますが。

財部 苦勞というか失敗が多いですよ。入試の模試を作って製本になってしまつて校正ミスが見つかり、結局、正誤表をページ半もつけてしまったんですよ。校正の落としは多いんです。(笑)

——大変ですね。それじゃあ、実際に考えていた編集の仕事とのギャップなんて、当然あるんでしょうね。

財部 もちろん。編集の仕事の内で校正がこんなに大事だとは思わなかったですよ。会社に入る前は、校正というのは、原稿チェックのことだと思つていたくらいですから。

夢で終わらせてはいけません！

——（そうじゃないんですか、と思わず聞きそうになる）ところで、財部さんは、去年三月に大学を卒業して、十月まで編集者一本に絞つて就職活動をしてきたそうですが、何かこだわりみたいなものがあつたんですか。

財部 編集者になるのはとても難しいことで普通だとあきらめて他へ就職しちゃいますよね。でも、それはしたくなかつたんです。夢で終わらせないで現実のものにしたかったんです。結局はこだわつていたんだと思います。

——絶対そうだと思います。それでは、なぜ、編集者になろうと思つたんですか。

財部 活字で自己主張がしたかつたのが一番ですね。考えていることを活字にして、少なからず世の中に影響を与えたかつたんです。しかも自分の仕事が残りますからね。でも教育関係じゃ、あまりできませんが……。

——なるほど……。それでも、自分の作つた問題が活字になつたときは嬉しかつたんじゃないですか。

財部 ええ、毎日ながめてます。(笑)

自分に自信を持って!!

——最後に、私も含めて編集者志望の人のために一言お願いします。

財部 現実には厳しいと思います。偉そうなことは言えませんが、自分に自信を持つことだと思つています。そして編集の能力を出版社に「売る」ぐらいの心構えがないとダメでしょう。まず、そのために能力を磨いて下さい。

——ありがとうございます。今日はとても参考になりました。私も頑張ります。

サラーム・アレイクム

カイロの広場に人は集まる

酒井 敦子

二月中旬で冬のはずなのに、日差しが強すぎるよ、と思いつながらタハリール広場へと歩く。気温は三十度以上もあるのに、セーターとジーンズという姿でも不思議に汗をかかない。これが乾燥した暑さかと実感する。

二つの橋でナイル川を渡る。ナイルも下流に近いが、大きな中洲があるからだ。一見、総武線の鉄橋から見える隅田川とあまり変わらないのに、川風に吹かれ、流れを眺めていると、クレオパトラもこの聖なる川を見ていたんだと思えてくるから面白い。

*

エジプトの街・カイロでは道路を横切るのに横断歩道がないし、信号もない。私が十日近く滞在したカイロ・ルクソール内で信号を見たのは、たった一カ所、市内の路面電車の走っていた道路だけだった。警官が道路中央の台に立ち、昔なつかしい身振りで信号もどきをしていたのが二カ所。

エジプトの道を気持よく(?)スピードを出して走り回る車はほとんどがボンコツだが、これは乗り心地に慣れてしまえばどうという

ことではない(ただ日本車の性能の良さを体験できることは確かだ)。ガタガタクシヤルクソールへと走つた寝台列車も、また、王家の谷をめぐるたロボの背の上もそれなりに平気である。

しかし、カイロ空港からホテルまで利用したバスだけはいただけない。夜九時を過ぎていたことと、東京から三十三時間という長旅で疲れていたことも作用するけど、停留所でスピードを落とすだけで乗る人は走り降りという特技がなければいけないというバスは、見たことも聞いたこともない。車内のスーツケースが転がるほどの運転ぶりも同様。

*

かなり脇道にそれてしまつたが、つまり、カイロでは道路を横断するということは、命がけなのだ。広いところだと上下各三車線もあり、六台分の幅で流れる車を縫って走り抜けなければならない。エジプトの交通事情で良いことあり、イスラム教のため、飲酒運転がないことだ。

市内は、旧カイロ、イスラム地区、新市街という三つの地区から成り立っている。タハリール広場は新市街に位置し、とても賑やかなところだ。新市街がカイロ市の政治・文化の中心なのだから、タハリール広場はその中心点といえるかもしれない。周りにはエジプト考古学博物館、内務関係合同庁舎、あこが

れのナイル・ヒルトンホテル、忘れてならないバスターミナル等が集まつている。東京駅に匹敵するラムセス中央駅がすぐ北にあり、銀座のような高級品店が立ち並び通りや、庶民の大市場も東側に広がっている。

タハリール広場に近づくと、ナイル川のさざ波がうそのように、騒々しさと活気で驚いてしまう。車のクラクションや人びとのかん高い声、屋台の客寄せ声。それに一日五回祈る、イスラム教のコーランの呼びかけ声がスピーカーを通して流れてくる。屋台やバスターミナルに群衆は集まり、水パイプでタバコを飲んだり、行き交う人を何もせずただじつと見ていたりする、そのほとんどが男性だといふのもこの広場の特徴だ。

ここに行けば、人の洪水と喧騒に出会えるといつても過言じゃない。しかし、このタハリール広場が最もエジプトらしい場所だと感じる。なぜだろう。ギザのピラミッド、ルクソール神殿、王家の谷を見てきて、もう一度この広場を訪れた後でも同じことだった。それは人びとがあふれているから、生活の音、臭いがあるからだろうか。この広場の喧騒を動というならば、静はナイルということになるだろう。静かに、時には荒々しく流れ、何千年ものエジプトの歴史を見つづけてきたナイル川。このタハリール広場とナイル川に、「サラーム・アレイクム(こんにちば)」。

「ラスト・ステージ」に寄せて

加藤 貴子

ラストには、最後という意味の他に、これからとか、一番新しいものというニュアンスがあるそうです。

一九八七年十二月二十三日

THE ALFEE IN BUDOKAN

この夜のコンサートのエンディング・ナンバーとして、まだ題名も決まっていな曲が披露された。披露されたというより、告白されたといった方が適切である。静かなイントロで始まるその曲は、ワンナイト・ドリームが終わってしまつた後の寂寥感の爆発だった。

彼の悲しみは、ホール中に雪のように降り、私たちの心に積もっていく。誰一人として、アンコールをかけられない。私は、ショックを受けたまま、青いライトに同化してしまい、そんな彼をじっと見つめたまま佇んでいた。特にへ時を歌い、愛を叫び、気がつけば冷たい風の中という一節が、胸に突きささる。切ないけれど、どうしようもなく真実の歌だ。自分の夢を信じて、ひたすら追い求めた男がいた。夢は手にしたけれど、自分の心はまだ満たされない。愛や夢を歌うほど、寂しくな

っていく。聴く側にも、心に痛い詩である。こんな気持のまま彼らのコンサートが、幕を閉じてしまったのは、この夜が初めてであった。——言葉が見つからない——

この曲の作者であり、ボーカリストでもある彼は、「コンサートが終わって、時間的にこれ以上できない時に、まだコールが続く場合があるわけ、ステージに出ていってやりたけだよ……。そういうコールを背中できくわけだよ。楽屋とかで、どうしようもない申し訳なさと、ここで何やってんだよ俺は！みたいな個人的などうしようもない寂寥感みたいなものが、同時に押しよせてくるんだよ、どつと、もうグチャグチャになつて」と、この曲の心情についてとある雑誌で語っている。このコンサートの帰り道、アンコールの代わりに、彼に返す言葉を捜しながら歩いた。いまだに、その言葉を見つけないで、形にできない。余りある思いを持ちながら、形にできないくやしき。私はこの時、初めての書きになりたかった。彼の寂しさを鎮める最高のレクイエムを書きたいと、心に命じたのである。

——どうしても、行かずにはいられない——
彼らのコンサートについて、吉見佑子氏が適切な表現をしている。「彼らのコンサートに居るとすぐ充足しているのに、一端終わってひとりになっちゃうと矢も盾もたまらな

くなる」。そう彼らのコンサートは、まさに麻薬である。終わってしまうと、次のステージに思いを馳せずにはいられない。彼らのコンサートは、いつでも「ラスト・ステージ」なのである。

♪ LAST STAGE

作詞／高見沢 俊彦

狭いステージの上でいつも
かわいた心癒すために
作り笑いを売り物にして
一杯の水とひきかえてきた
休むことも許されず俺は
なんの為に心を削ってきたのか
時を歌い夢を叫び
気がつけば 冷たい風の中
愛と挫折をくり返ししながら
痛みをすべて唄に託してきた
疲れた体を癒す場所は
君のその胸の中
飛べない翼をひろげたとき
誰もが夢追い人になる
ラストステージ もう二度と
愛の唄は歌わない。

(一部抜粋)

ヘラクレスたちの夜明け

松崎 孝子

師走の歌舞伎町はエイズ騒動のあおりを受けてか、例年になく不景気である。

広田綾子が入ったばかりのボーナスを持って、邦江の店へ駆け込んだ。

「ママ、リザーブキーブよ」

「やあ、綾子嬢。景気がいいじゃねえか」

「竜一さんも来てたの？ お久しぶりね」

「まったくしけてるわね。二丁目の遊び人一人暮しのOLか。もうからないはずよね」

めずらしく邦江が酔っている。

「ママはこのところ毎日これだ。綾ちゃん、励ましてやってくれよ」

綾子にとって、この店で邦江や、常連の三雲竜一と飲みながら交わす会話は、何よりのストレス解消法である。邦江と知り合ってから半年足らずだが、同じ二十四歳と聞いて、まったく住む世界の違う邦江には興味が湧いた。

そして何より、この店へ通う第一の理由は、竜一の存在である。邦江も竜一も自分のことについて多くを語らない。綾子も、尋ねないのがルールなのではないか、と思っていた。

彼は三つ年上らしいこと。二丁目でバーテンダーをしていること、それしか知らない。

朝の四時まで入って来る客もなく、邦江はだいぶ酔っていた。

「綾ちゃん、きょうはあたしの部屋へ来るといいわ。女を泊めるのは初めてよ、フッフ」

明治通りにある邦江のマンションで、綾子は高級ダブルベッドに戸惑っていた。邦江は鏡に向かい、乱れかけた髪の間から、一本一本ヘアピンを抜いてゆく。所在なく邦江の動作を見つめながら、綾子はゆっくりと話し出した。

「ねえ、ママも気付いてたかな。あたし、竜一さんに惹かれてるの。本気なのよ」

「一瞬、邦江の手が止まった。少し眠らないと……」

邦江はすつくと立ち上がり、部屋を出て行った。少しして静かに毛布に入ってきた邦江に、綾子がおやすみなさいと言おうと彼女を見ると、その顔は凍りついたように冷たい表情をしている。

「変だわ、ママ。いったいどうしたの」

綾子がそう尋ね終らぬ間に、邦江は毛布をめくり、自分の裸体をさらけ出した。

「まさか！ マ、ママが…男？」

「かわいそうに。あのコ、もう歌舞伎町には

来ないぜ。こんなオモチャに騙されて……」

邦江が痛い思いをして外した男性自身を手に取りながら、竜一は二杯目のブランドーを飲んだ。

「冗談じゃないわ。あんたはあたしだけの竜一よ。お店はカンコ鳥だし、あんただけがあたしの支えなんだから。誰にも渡さない」

「邦江、俺のことも彼女に話したのか」

「バカね。そこまでバラしたらあのコ、ショック死するわよ。ねえ、それにしても、コレ付けてると、どんなにしつこい客も顔色変えて逃げ出すわよ。日本の男は、まだまだ同性愛には走らないってことね」

「これ以上エイズの素が広まらなくて結構なことじゃないか」

邦江は竜一の手からグラスを取りあげ、ベッドへ手招いた。

「男同士はもう許されず、男女の愛でも感染するのね。ねえ、あたしたちの愛が一番素敵だわ。やっぱり、女って強いものよ」

「レズビアンが、第二のエイズを生み出さないという確証はどこにもないけどね」

それは三雲竜子自身のやり場のないつばやきのだろう。

綾ちゃん、この街で恋なんか本気で拾っちゃいけない。この街で生きていかなきゃならない者以外はね……」

邦江は綾子に、そう言いたかった。

やくみの妙。

人の薬味になりたい
南雲 今日子

日本料理の風情は、旬の素材はもちろんのこと、四季の薬味が最高の役を演じていると思います。

「山椒は小粒でピリリと辛い」というように、薬味たちは、ほんのちよっぴりで最大の効果を発揮できる心憎いもの。

私は、食べものの薬味に非常に拘って暮らしている。

薬味は料理に添え、味覚を刺激させ、食欲を進める香辛料のこと。

効用は香りづけ、見た目のおしゃれ、味の引き立て役、消毒消しと、いろいろありそうです。

この季節、秋～冬の代表選手である柚子の薬味に替わり、春の香り付けの木の芽が出番を待ちこがれ、枝先で芽をふくらませています。

ポンと平手打ちした若芽を貝や鯛の潮汁に浮かせたり、土の中から頭を出したばかりの筍の木の芽和え……と、出盛りの材料は木の芽との相性が抜群です。

にぎりずしに山葵、鯖ずしに生姜、麺類にさらし葱、おでんに辛子、鱈ちり・鉄ちりに紅葉おろし、ポン酢にさらし葱というように、それぞれ絶妙の相性があるように思います。

長い食生活の経験から、食べ合わせ、毒消し、よりよい食べ方を見つけ出し、調和と美味のたくみな演出が日本料理を引き立てます。

薬味の扱いは、料理の食味を壊してしまうように気張ったり、肩を

ロレンスと「チャタレイ夫人の恋人」

澤山 治代

「愛」という言葉が氾濫している。電車の中吊の広告にも「彼との愛を育てるには」とか「愛される女とは」とやたらに目にとびこんでくる。たいていが女性週刊誌の見出しであるが、いかに世の女性が「愛」という言葉に関心があるかということの証明にも思える。

そんな中で今、チャタレイ夫人が新しく思えてくるのである。D・H・ロレンスの一九二八年の作品である。

あらすじ——クリフォード卿夫人コンスタンスは戦争で下半身不随となった夫によく仕えていたが、夫婦間には性の関係もなく、次第に恐ろしい空虚感にさいなまれるようになる。ある日散歩のおり出逢った森番メラーズに惹かれ、二人の結びつきが生まれた。

この作品の中には「子宮」「ペニス」という性を意味する言葉がはつきりと書かれている。作中人物が実に真面目な議論・思想を語る時に限ってそのような言葉が使われている。日陰で語られるのが常識であるのに、そのような場所で語らせた作者の意図は何であったか。

精神生活と気位だけは高いが下半身不随の夫クリフォードと、階層は低い思想も肉体の魅力も備えた森番メラーズとが登場して、物語は進行していく。あきらかに対照的存在である。

ロレンスは、性とは宇宙における男女間の均衡であるべきと述べ、「接触によって互いに生命を与え合うからでそういう合一こそが性行為なので二元性から一元性へ徐々として進んでいくところにあらゆるものが発現する」という哲学をもっている。

そのことを頭において読み進んでいくと、ロレンスはクリフォードの愛が虚構であることを物語を通して証明しているように思えるので

張った扱いをされると、台なしになってしまいます。さりげなく気心の合うものを付け合わせると、最高の旨味が出せます。

こちら狭い台所で調理しようと思っても、合う薬味がみあたらない場合には、メニューの主役を出演させないことにしています。なぜかといえば、上手でない料理をおいしく食べていただくには、いくら腕を振るってみたとて薬味の妙趣には勝ち目がないからです。

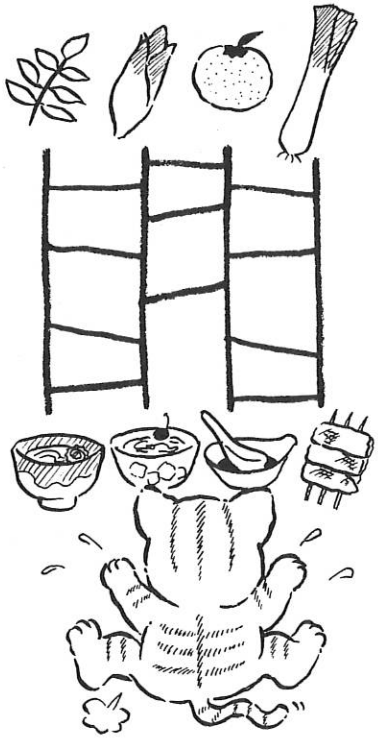
薬味なし、つまなしの刺身や酢のもの、山葵ぬきのにぎりずし、どんなに素晴らしくイキがよい鯛でも鯛でも、箸をつける気がしないでしょう。柚子のひと切れ、ひとひらの木の芽、天盛り茗荷、大葉、七味、どれも飾りでなく、大事な味付けになっているわけです。

旅先で出会った、木の芽田楽に貝割れ菜二本をのせた薬味違いや、薬味ナシには腹立たしくなる。色目はよいが、味の違いにガックリ。

最近薬味にかかわらず、思いもよらぬ取り合わせで、ミスマッチの味わいを楽しんだりすることもある。冷奴に薬味噌など……、新発見もまたおもしろい!!

ということで、薬味は食欲を増進させる大人の「食のびやく」です。

♥薬味合わせの「アミダくじ」



ある。クリフォードの執着がだんだんと重荷になっていくコニーに、心の飢えを一時でも満たしてくれる男、森番のメラーズとの出逢いがある。体の関係から始まるが、彼との出逢いによりコニーは本当に「生きる」ことを求めるようになる。

近所に住む四十八歳の美容室の先生にインタビューしてみた。

「いくら精神レベルの高い夫としてもセックスのないのは女はいやなのよ。あの作品はホワイトカラーよりブルーカラー、つまり頭脳はなくても性欲を満足させてくれるたくましい肉体をもった男との情事を描いた作品よ」

ロレンスは実に正直に人間の愛の本質、また人間の心理をとらえているのである。にもかかわらずエロチシズムだけが注目を浴びてしまっている。まるでものを見るのに度の強い凸レンズでのぞいているようなもので、行間の一部分だけが拡大解釈されてその陰に筆者がいわんとしていることがあまりにも世の人に伝わっていないのである。人の心の陰の部分のエロチシズムの部分だけに共鳴してしまっって、作者の言葉の裏の意図が伝わってこないのである。

ジョストジャハン監督の映画「チャタレイ夫人の恋人」は、誤解に基づいてつくられていると断言してもよいくらいである。もしくは、本物そっくりの似せ物をあえてつくったともいえるくらいである。映画では性的描写だけにウエイトが置かれていて、森番メラーズに人格を与えていないのである。

小説の中のメラーズは精神的懊悩、葛藤の中でコニーと結ばれていく。人間不信の男が人を愛するに至るまでの葛藤がある。

文中の一節に「コニーは精神生活というものが好きであったし大きな喜びをそれから感じていた」とあるように、この作品は精神の重さも充分に訴えている。ただ愛とは精神だけでも体だけでもないというあたり前の事実を訴えているのである。

日本のなかのアメリカ

三人娘座間キャンプちらりのぞ記

ゲートをぬけると異国情緒たっぶりのベースキャンプ。キャンプとはいえ、青い芝生や広々とした家は、うらやましい。道路を歩いていると、アーミールックの外人が出てきたり、遠くでもすごい音が聞こえたりして、何度かびつくりした。キャンプ内では人が優先なので、車の方がすぐに止まってくれる。数百メートルはなれた外の道路とは違い、考えられないほどのんびりしている。ただ空軍の横田基地より閑散としていて、寂しい感じがする。

「今でも地図なしでは歩けない」

私たちが最初に訪問したのは、Mr. Will-Edger——日本人のワイフをもつ五十二歳のアメリカ人。古い洋館の階段を上り部屋に入るまで、数人の外人に話しかけられ、緊張が高まった。私たちのカタコトの英語を笑ったり顔をしかめたりしながら、インタビュは始まった。少し残念なことは、ワイフのおかげか、すべてのことが日本びいきなのだ。日本の生活も基地の中にある限り、何の不満もないと言う。円高についてたずねると、彼の

サラリーが二万九千ドルなので、親子三人で生活するには充分だが、外に出ることはむずかしいという。一ドル＝三六〇円の頃がなつかしいそうだ。

東京の印象では、新宿は、今でも地図なしでは歩けないと言う。素晴らしいが、少し汚くて、人が多すぎるそうだ。原宿はパフォーマンスや人びとの服装がおもしろかったとか。彼には、二十一歳になる息子がいるが、日本のお嫁さんはどうかとたずねると、Very goodと言っていた。仕事中心ということもあって十分足らずのインタビュだったが、とても優しい目をしていたのが印象的だ。いつまでも奥様と仲良く……そんな気持で外に出た。

*

五分ほど歩くと、「サティーワン」の看板が目についた。店の中は、スクール帰りの子どもたちでにぎわっている。子どもたちのもっているアイスの大きさに驚いて、一人に聞いてみた。シングルで七〇セントだそう。キャンプの子どもたちは塾などに通わず、のびのびしていて、明るい。ローラースケートやスケートボードやバスケットボールなど

本物のコインがジャラジャラ!

お腹はパンパン。次に満たしたいのは、サイフの中身。レストランの隣は、スロットマシンが並ぶゲーム場だ。現金を五セント玉に替え、ゲーム場に向かう。大当りのベルの音が聞こえてくる。おもちゃのコインなどではなく、本物のお金が出るマシンだ。

私たちが使っていたマシンは当りが出ないので、別の機械にかえようとすると、中年の婦人に大声でどなられた。その婦人は、一人

で二台のマシンを使っていて、私たちがさわろうとしたのが、その一つだったのだ。あまりの迫力に「すみません」とあやまったが、その後もブツブツと嫌味を言われた。

ゲーム場の場合に限らず、キャンプ内の中年の日本女性はみな冷たい。ウエートレスも私たちを見て、イライラしていたようだ。

その後私たちは、マシンで大当りした二人の婦人を目撃した。一人は金髪の外国人、もう一人は日本人だった。「おめでとう」と言うと、前者は嬉しそうに「ありがとう」と返事してくれた。それに比べて後者は振り向きもせず、ムスツとしていた。この違いはどこからでてくるのだろうか。『余裕』という言葉がふと胸をかすめる。

帰る間に立ち寄ったバーで、私たちは一〇〇%の異文化を感じた。カウンターで一杯ずつビールをもらい席につくと、ジャニス・ジョプリンの「男が女を愛する時」や、オーティス・レディングの「ドック・オブ・ザ・ベイ」が聞こえてくる。ゆつたりとした雰囲気の中で、知らない者同士が声をかけあう。そんな光景をうらやましく思いつながら、もう一度来たいと思った。

本当に不満はないの?

基地で生活する人びとは、何も不満がないように見えた。テレビや新聞で報道される外

で遊んでいる。私たちは子どもたちとボールを投げ合いながら、レストランに向かった。室内に入ると灯りはテーブル上のランプだけ。周りに英語がとびかい、ウエートレスの運ぶ盆の上にチップをのせる。やっぱりここは「外国」なんだ。落ち着かない気分がメニューを見る。また英語だ。料理の名前さえわからないのに、そのうえ英語だなんて……。絶望的な思いでひたすら文字をたどっている。と「Steak」という文字がとびこんできた。とりあえず、三人ともこれを注文する。

料理が運ばれてくる間、私たちはまったく無言だった。何か話そうと思っているのに言葉が出てこない。他の客と同じようにこの「ディナータイム」を楽しみたいのに。もう完全にあがっている。気がつくのと、隣のテーブルにウエートレスが話しかけている。ステーキの焼き方を確認しているらしい。私たちにはそんなこと聞かなかつたのに。英語がちゃんぶんかんぶんなのが、端から見てもわかるのだろうか。

レストランで一番心に残ったのは、やはり料理そのものだ。とにかくおいしい。ボリュームたっぷり、味つけもほどほどだ。カロリーが多少は気になるけれど、三人とも満足気。大きなステーキとサラダ、パン、コーヒール、お酒までついて、一人分十二ドルだ。これだけでもキャンプに来た甲斐はある。

国人とは全然違う。彼らは円高による緊張感を、まったく異なる形で受けとめていた。「そうだ、ここは日本といえどもアメリカなんだ」——改めて、そんな思いにかられた。ここで出会う人は誰もが皆、日本は最高、と言う。たしかにこの広大な土地と緑は、私たちもうらやましく思う。しかし、そう思うのは、ないものねだりの感覚にすぎない。煩雑したところで過ごしているから、うらやましいだけだ。ニューヨークなどの大都会に住んでいた人が、刺激のないあの場所であらして欲求不満にならないのか、首をひねってしまった。

——編集後記——

英語が思うように話せなくて困った。前の夜から練習をしたのに——今度は、ボウリングをしたり映画を見に行きたい。もちろん、もう少し英語をマスターしてから……。

(あの まさこ)

まだ二十三歳なのに、ギブ・ミー・チョコレートの三語が頭をはなれない私。結局、外人恐怖症は治りませんでした。グスン。

(石井 るりこ)

インタビュと、そのまよめの難しさは、想像を絶するものがあった。鉛筆を持ちながら午前零時をむかえるのは、いったい何年ぶりだったのかな。(宇佐神 静江)



「息子さんに日本のワイフはいかが?」「Very good!」

みんなまで歩けば東京人？

— 男潜・女浮の時代 —

花田 千恵子

私は田舎者だ。東京へ出て来てまだ二年にもならない。だからピカピカの田舎者だ。要するに、クサイ、とか、イモ、とか呼ばれる類の人間なのだろう。よく、ラジオやテレビなどの若者向きの番組で連呼され、少なからず笑いをとっているようだが、別にその定義が確固たる位置にあるわけではないし、気にしなければ、まったく気にならない。

東京へ出て来て一番困ったことは、やはり地理の不確かさによる「迷子」である。むかし流行した「ここはどこ？ 私はだれ？」という文句を思わず口にしてしまったことが何度あったことか。遠くもない距離に縦横に敷かれた地下鉄の線と駅、ひと駅、ふた駅歩いたところで、大したことはないのだが、駅近くになると歩いている人間がどつと増え、思うように進めない。そういうえば、誰かが得意げに話していた。都会の人間、特に東京人は、まるで何かにせかされているように速足で歩く、そこが田舎から出て来た人間との大きな違いだ。だがそれは、単なる錯覚だ。

地理の不安な人間には、地元の人間がそう見えるだけで、東京人に限ったことではない。日曜・祭日に歩くことは、実に気力と体力がいる。趣味はショッピングと答える人は、思わず神棚に飾りたくなる。ひと昔前までは、パーゲンセルというものは女性を語る代名詞だった。今はそうでもないらしい。

まあ、男性の職場に女性の進出が目立つ昨今であるから、その反対の現象があったとしても、とりたてて騒ぐことはないのかもしれない。だが、なんとなく情けない。考えてみると、女性というのはいかに得である。女性が男性の職場なり仕事なりに進出することは、たくましいとか、たのもしいか、そう悪い響きを持たない形容詞を贈られるが、男性だとそうはいかない。なんとなく情けない、という表現になってしまふ。つまり、男性化は良いが、女性化は良くないというわけだ。簡単にいえば、向上と後退の関係にあたり、男尊女卑に他ならない。

落ちこんだとき、BGMに暗い曲を選び、もうこれ以上は潜れないというところまで底辺を極めれば、あとは浮上するのみである。失恋に、泣いて泣いて泣きまくり、涙も涸れはて、「あ、あ、このまま死ぬのね」などとしなのひとつもつくったところで、そのうちお腹の虫がグウとなり、思わず赤面するのが

おちである。そして突然気づくのだ、こんな素晴らしい自分をつつた男の見る目のなさに。そんな男をつかまえたかった自分の運の良さに。ラッキーと、鏡に向かってVサインを出す明日がきつと来る。

そう、この「明日」こそが女性の未来なのだ。今まで底辺の位置に甘んじていた女性の变化は、浮上にもなう変化である。良くなりこそすれ、悪くならぬはずがない。女性の権力が、家庭内だけでとどまらず、社会全体にはびこる——いや、拡大する現在、確実に女性への比重を傾けつつある。だから女性に生まれたことを感謝して、世間にある年齢制限の壁を、スクラム組んで打ち破ってしまえば、もう怖いものは何もない。

いつか、そう遠くない未来に、忙しく立ち働くオフィスの片隅で、その特権たる美しい化粧術とファッションに身を包んだ女性が、目の前にかしこまった、内にやる気と情熱を秘めた、ちよつとトウのたつた男性に、「あなたももう少し若ければねえ」と残念そうに微笑む姿が、あたりまえの世の中になるかもしれない。

東京の生活は、必ずなにかの助けがある。衣食住、すべてどこかにたよっている。オリジナルで生み出せるものは、ゴミくらしいものだろう。さて、男性と女性、分けるとしたら東京人はどちら？ 東京人は偉い？

いま、しなやかな女たち

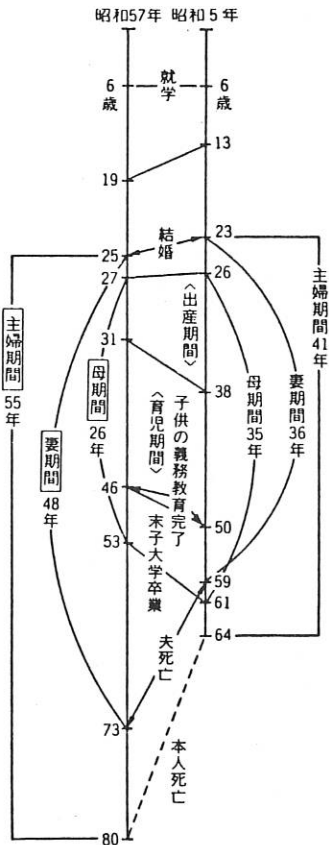
時代の風によって

渡辺 頼子

「原始、女性は太陽であった」に始まる文芸雑誌『青鞥』は、一九一一年（明治四四）に創刊された。この宣言は、女が、人間として見なされない時代を長く強いられた、そんな歴史を覆す、ウーマンパワーの爆発を告げるものであった。

あれから七十余年経った現代、まさに「女の時代」と言われている。博報堂生活総研発行の『時流は女流』のはしがきによると、「女の本」をまとめたのは、「女性の時代」が第二階段に入ろうとしている時期と判断したから、とある。

女性のライフサイクルの変化



☆最も伸びたのは主婦としての時間→主婦の変化を見続ける必要がある

(備考) 経企庁「国民生活白書」(59年版)をもとに作成。

戦後、民主主義の導入とともに、男女平等や選挙権の獲得など、制度上にも多くの変化があり、男性並みの自由や、待遇、地位を求める動きを、第一段階としている。

朝、夫や子どもを送り出して、テニスの練習に出掛ける人。週三日、パート勤務をし、残りの日には、料理教室、エアロビクス、水泳にとフルスケジュールの主婦。「国家秘密法制定反対」の女性の会を作った友達。彼女とは、消費者運動を通じて知り合い、教育問題を考える研究会へとながっていった。十年近く、週二、三日のデパートへの勤めをしながら、地域でも活躍している。超人的な女性をもう一人紹介すれば、美人でファッションで、私の知る限りの運動や会を中心に名を連ねている。文化的イベントを、どんな企画・運営していくし、会合には、必ずといっていいほど、手作りのお菓子やお弁当

で人をもてなすホットな人。最近では、趣味が高じて、数人の主婦とお弁当屋さんを始めました。

このように、時間の意識的な使い方や、コロナ志向（心の豊かさ）や、自己充実を求めることなど、男性より、つねに一歩先を行くおんなたち。「生活者優先の時代」を名実ともに握っている女性をターゲットにしてビジネスが起こり、広がっている現代——まさに「時流は女流」なのだ。

多種多様な生き方をしている日本女性。仕事をもち、自分自身を持ち、自分の意思で選択をし、長期的な視点にたった人生コースを設定するなど、第二段階にきている女のあり方が、いろんな角度から考察される。詳細なデータと、それにもとづき分析されたこの本を、私は、ひとつひとつうなずきながら読んでいく。

しかしそこで感じたのは、「男」や「女」という既成の枠組にこだわりを持っていては駄目ではないかということである。「男女とも」ここち良く暮らしていける社会でなければ、と考える。

そのためにも、これからの社会を担い、時流の真只中にある私を含めた女性よ、時流に流されることなく、男たちと手を携えて、良き時代を築くべき、頑張らなくてはと、思うのである。

愛を描く作家

渡辺淳一の魅力について

中里 智子

好きな作家は誰かと聞かれたら、迷わず渡辺淳一の名をあげる。もともと、最近ではほとんど読んでいない。既刊のものは読み尽くし、新刊が出るのを待っている状態だ。

私が初めて渡辺淳一の作品を読んだのは、大学三年の夏だった。東北一周旅行の後半に、友人との会話にも飽きた頃、八戸駅の売店で『パリ行き最終便』の文庫本を見つけた。今まで読んでいた傾向とはガラリと異なり、私にとっては「大人の世界」という感もあつたが、とりわけ表題作のすきのない展開、そしてすっきりした文体が私の好みに合い、急にファンになった。多分、そのときの私の年齢とも微妙に関係があつたと思う。

氏の作品内容は大きく三つの分野に分けられる。第一は氏が外科医であつたことからの医学物、第二は伝記を素材にした小説、そして第三が氏の本領と思われる恋愛物である。

現代は恋愛小説が不毛な時代だと言われている。そんな中であつて、渡辺氏はこの分野における第一人者といえるであろう。氏の恋愛小説は短編・長編を問わずほとんどが不倫

小説で、著書『解剖学的女性論』の中でも、「真実の愛は不倫の中にしかない」と断言されている。確かに何もかも自由な現代にあつて、規制されること、タブーであることを追求していくと、結局そのテーマになつてしまふのかもしれない(もともと、最近では不倫ブームで、このテーマの真実性も怪しくなってきたが)。

とにかく、女主人公が愛に悩み傷つき、その多くがアン・ハッピーに終わる過程で、女性の心理描写が実にみごとに描かれているのいつも感心する。以前、友人の一人が、「どうして、こんなに女の気持がよくわかるのだろうか」と私に洩らしたことがあつた。それは彼女が『まひる野』を読んでいたときで、「何度も泣けてしまった」とも言っていた。

数多い氏の作品の中でも、『氷紋』『まひる野』『野わけ』『化粧』あたりが長編の代表作であり、また私の好きな作品でもある。

同じ不倫を扱いつつも、最近の『ひとひらの雪』『愛のごとく』『別れぬ理由』などは少し趣きが異なる。男性側の視点から書かれているということで、男性ファンが増えたというが、私自身はあまり好きではない。なんとなく情緒が薄れてきたように思えるし、「浮気」を公認させていくような描き方が気にかかる。

女性の気持をこれほど細やかに書ける男性

の女性の老後の幸福度が変わってくる。

これから紹介するのは、私たち同級生同士で実行している、いいおばさんになるための心得である。提案者は、都の西北にある大学の伊東教授である。先生は、昨年還暦を迎えられたが、スキーの一級免許に挑戦中のスマートな男性である。また、テニス歴は何十年の大ベテランである。ある会で、先生から長年テニスコートで観察したおばさんへの提言を伺う機会があつた。早速、先生のお言葉を「おばさんの心得」として八個条にまとめあげ、コピーを同級生たちに配布した。冷蔵庫に貼って毎日読みあげている友人もいるほどおおいよるこべれた。

「おばさんの心得」

第一条 おばさんは一所懸命やらなければならぬ。要領よくできるからといって手抜きをすることは、相手に対して失礼である。

第二条 おばさんは言い訳をしてはいけない。自分の失敗は取り繕つたりせず、いさぎよく認めるべきである。

第三条 おばさんは気配りをしなければいけない。年長者とか女性とかの理由で、他人に甘えてはならない。周囲への思いやりの気持が必要である。

第四条 おばさんは気配りをしすぎてもいけない。女性の美德も、過ぎたるはなお及ばざるが如しである。むずかしい所である。

おばさんの心得

小田島 美紀子

今日は、私の誕生日であつた。めでたいと喜ぶほどの年齢でもないから、密かにお祝いをした。一年間よくがんばつたなあ、と自画自賛する。「明日から、また新しい目標に向かって突っ走ろう」と、自分に言い聞かせる。

十代のころは、時間を持て余し、早く大人になりたいと願つたものだった。花の二十代を過ぎると、三十、四十のハードルは、あつたという間に越えてしまった。子育ても終わり、ほつとして、自分自身を振り返ってみると、「おばさん」と言われる年齢になつていた。

近年、ずうずうしい中年女の代名詞として「おばさん」という言葉が流行している。「若者よ、明日はわが身だぞ」と、居直りたい気持は十分あるが、年の功でぐつと押さえる。「奢れる者は、久しからず」ということが、分かつているからである。

何でも分かつたつもりでも、おばさんの雰囲気にとっぷり漬かつたままでは、かわいいおばあさんになれない。日本の超高齢化社会という現実の中では、かわいがられる老人であることが、幸せな老後を過ごせる条件なのである。おばさん時代の過ごし方次第で、そ

作家は非常に少ない。もしかしたら、女性作家以上ではないかと思えるくらいだ。そういう観点から考えると、男性、それも女性の取り扱いに手を焼いている人に、お勧めしたいほどだ。

それからまた、氏の作品のヒロインが魅力的である。理知的でちょっと気が強いところもあつて、色白の小柄で、和服の似合う日本的美人。潔癖性で感覚が鋭く、ふだんはおとなしいのに、いざとなると急に大胆になり、官能的でさえある。これは多分、そのまま渡辺氏の好みの女性像と思われる。

また作品全体に彩りを添えているものに、小説の舞台となる北海道や京都の自然、とくに四季の移ろいや行事、食べ物などがある。北海道は氏が生まれ育ち、長く医者をしていた地であり、その寒々とした自然が医学物の舞台としては非常にマッチする。また、京都は氏の憧れの地らしく、その風物の描き方がとてもあでやかである。そのあたりが女性に好まれ、また映像化しやすい条件にもなるのだろう。

最後に、私の一番好きな作品として、短編の『パリ行き最終便』をあげたい。これまでに何十回も読んだ。渡辺氏の魅力は、元医者という醒めた視点からの描写、それでいて限りなく女性に対して優しい作家——端的に言うてこれに尽きるのではないかと思う。

第五条 おばさんは、うじうじぐだぐだしてはいけない。女っぽいと勘違いされると、進行の妨げになり、見ても格好が悪い。

第六条 おばさんは、ちょっとだけ科をわつた方がよい。小首を傾げて、にっこり微笑むぐらいの配慮は、周りの人々を嬉しがらせる効果がある。態度で示すことも大切である。

第七条 おばさんは健気でなければならぬ。ずうずうしい態度をとるおばさんが多いことへの警告である。健気なおばさんは際立つてかわいらしく見えるにちがいない。

第八条 おばさんは批評したら、後で打消さなければならぬ。目が肥えているので、つい感想を述べてしまう。批判がましい意見の時には、すぐその後で上手にフォローして、相手を傷つけないよう努めるべきである。

以上の「おばさんの心得」八個条は、だれにでも当てはまる心得ではないだろうか。おばさんを、おじさん、おじょうさんなどと置き換えても十分通用するのである。

誕生日にあたり、自分の生き方について考えてみた。ふと思ひ出して、「伊東先生語録」を取り出してみると、人間関係の潤滑油であることを再認識した。この語録を基本路線として守るように努力すれば、今後納得のいく生き方ができるはずである。いい生き方をすることは、いい死に方にもつながる道であるからだ。

努力と工夫の実行あるのみ

奥田 史郎

文章は誰にでも書ける。しかし、マスコミやジャーナリズムで通用する文をきちんと書くことはなかなかむずかしい。まずそれが自分本位でなく、「説得性をもった」「客観的な」文であることが必要である。しかも書き手の個性が感じられる文章となると、書ける人はいよいよ少ない。

文を書くのは字づらの問題よりも、現実や多くの情報をどう見、そこから何を取捨選択し、どう構成してまとめるかということが問われる。いろんな物事を注意深く観察し、よく考え抜き、論理や感情を誤解少なく伝えることを意識して修練し、推敲を重ねる。これが文章上達の基本であろう。語順や句読点もよく練り、多くの表現法を学び、言葉の正しさや美しさとともに品格にも目を配り、読者の立場で点検することが大切である。

どの分野でも最初からの名人はいない。基礎はいくつか習ったのだから、これからそれをいかに生かすか、その努力や工夫を実行する積み重ねがみんなの実力や個性となっていく。そのためには、己の位置を知り、他人の長所や意見で学ぶべきところは謙虚に、しかし貪欲に吸収してほしい。

花よ、ゆたかにひらけ

河原 淳

第五期はいまの時点で園芸にたとえるなら、平年作を下まわっているよう。教室の雰囲気やどんより曇っているし、瞳がきらきら輝く受講生もわずかしか見当たらない。

豊作への可能性を秘めていた第一期や第三期では、欠席者も少なく、質問も活発に放たれた。講義のあと、まんだら屋などでの二次会についてくる女性も多かった。



エディターやライターの道に修了や卒業はない。この教室を終えても、精進の道はなおも続く。たゆみなく学び、見聞を広め、企画力や表現力をみがけば、プロになれる。すでに種はまかれた。水をやり、肥料をほどこし、太陽の恵みを待て。

花よ、ゆたかにひらけ。
第五期の花よ、ゆたかにひらけ。

商人の「勉強」と学生の「勉強」

加藤 文治

(放作協・事業委員長)

いまではごく普通に使われている「勉強する」という言葉は、明治期の新語である。

本場の中国においても、日本の江戸期にも「勉強」を「Study」の意味には使わなかった。文字通り「そうはならないのを勉めてする」ことで、商人の「今日は勉強してお安くしておきます」の方が似つかわしかった。

それが、いつの間にか「学ぶ」となって代ったのだ。明治の若者たちが「英語を勉強する」というのを聞いて、年輩者たちはさぞかしおかしく思ったことだろう。

——年末の講義でこんな話をしたことがある。覚えているだろうか？

たしかに、本来「勉強する」と「学ぶ」とでは意味がちがうのだが、まるで関係ないかというところでもなさそうだ。

ものを「学ぶ」ということは、決して楽なことではない。自らの怠け心に打勝って、積極的に、学びとることが「勉強」なのだ。まさに「そうはならないのを、自ら勉めてする」ことである。

ヒナ鳥のように口を開けていても、誰れもエサを配んではくれない。このことを肝に銘じて、今後とも真剣に「勉強」して欲しい。